

9月4日(土) シンポジウム2 第1室(0-702)

<英語語彙研究会企画>

JACET 8000 に基づく語彙の応用研究

Applied Research on Vocabulary Based on JACET 8000

英語語彙研究会

司会・報告者：清水伸一 (安城学園高)

報告者：村田 年 (和洋女子大)

石川慎一郎 (広島国際大)

上村俊彦 (県立長崎シーボルト大)

相澤一美 (東京電機大)

杉森直樹 (大阪電気通信大)

目的

英語語彙研究会は、JACET8000 基本語改訂委員会として「JACET 基本語彙4000」の改訂作業を進め、2003 年に「大学英語教育学会基本語リスト(JACET 8000)」を発表した。この作業は、70 余名の研究者の手によって行われたものであり、語彙表は旧版を全面改訂したものとなった。

この改訂作業の流れは「JACET 基本語(改訂4版)について」(2001)、「JACET 基本語改訂における科学的学習語彙リスト構築の試み」(2002)、「JACET 8000: A Word List Constructed Using a Scientific Method and Its Applications to Language Teaching and Learning」(2003)で報告されてきた。また、「JACET8000 の活用と応用研究」(2003)、「JACET 8000 活用事例集:教育と研究への応用」(2004 発行予定)では、JACET 8000 を用いた応用研究を紹介した。このような流れの中で、コーパス手法を用いて新たに編集された JACET 8000 を、研究・教育の分野で効果的に用いる方法に関する議論が高まってきた。

この議論を受けて、今回のシンポジウムでは、JACET 8000 を用いたテキストの語彙分析及び学習者の語彙レベル測定、JACET 8000 のレベルタグを付与したコーパスの構築と利用、学習指導要領の制限語彙と語彙習得指導に関する提案等を行う。この提案を契機に、JACET 8000 が研究・教育の分野で利用しやすい語彙リストになること、そして、様々な活用事例を通して得られた知見が今後の改訂の際に生かされていくことが切に望まれる。

発表の骨子

1. JACET 8000、学習指導要領の制限語彙、そして語彙習得指導

JACET 8000 は、日本の英語教育の現状を十分に配慮し、様々なレベルの学習者に対応できるようにした語彙リストである。一方で、日本の中・高校では、

学習指導要領に基づく語彙によって教科書が編纂され、実際の授業が行われている。今回は、JACET 8000 と学習指導要領の制限語彙を比較し、学習指導要領にどのような問題点があるかを考慮し、効果的な語彙習得指導をどのようにすべきかを提案する。

2. 大学生の語彙力の実態について：JACET8000 に基づく試行調査

大学生の英語力低下、とくに語彙力低下が叫ばれて久しいが、大学生の語彙力の状況を実証的に調査する先行研究は決して多くない。本発表では、JACET 8000 の語彙レベルに基づく語彙力テストを複数の大学において試行し、その結果から、学生の語彙力の実態を探ることとしたい。

3. 大学生の英作文に見る英語語彙

ここでは、学習者コーパスの構築とその分析方法を提案し、その結果を考察する。TOEFL の TWE 課題を含む、課題に基づく大学生の英作文データを、JACET 8000 LEVEL MARKER や WordSmith Tools (WordList、Concordance) で検証する、という方法をとる。また、この分析結果を考察し、どの程度のレベルの active vocabulary が学習者に必要とされるかを提案する。

4. 教育の現場で使用されているテキストの語彙検証

日本の英語教育の現場で使用されているテキストデータがあれば、それらを JACET 8000 と比較しながら、語彙レベルの測定が可能である。このような検証を通して、TOEIC・英検などに合格するはどのくらいの語彙が必要か、センター試験などの大学入試にはどれくらいの語彙が必要か、高校の教科書だとどのレベルの語彙がどれくらい不足するか、自分の授業で使っているテキストはどれくらいのレベルか、といった疑問点を明らかにしていく。

5. JACET 8000 のレベルタグを付与したコーパスの構築と利用

既存の英語テキストに JACET 8000 のレベルを付与したコーパスを構築し、意図する語彙レベルのみで構成された英文を検索するシステムの構築とその利用方法について考察する。このシステムにより、JACET 8000 を教育で利用する際に、適切な例文を同時に提示することが可能となると考えられる。それには、ターゲットとする語彙のレベルとともに、例文全体を構成する語彙のレベルをコントロールすることも必要となる。その作業が自動で行われれば、教室での利用がしやすくなると考えられる。